

第4回 十和地域まちづくり推進協議会 会議録要旨

【日 時】 令和4年6月21日（火）午後7時00分～9時00分

【出席者】 松下敦委員、中平光高委員、松下洋平委員、中平良子委員、伊賀守委員、田頭誠志委員、鈴木幸代委員、村井洋平委員、栗原あゆみ委員
(欠席：森正和委員)

【行政側】 富田地域振興局長、畦地町民生活課長、大元政策監、大河原文化的施設整備推進室長、吉川町民生活課副課長、上川地域振興課副課長、都築地域振興課係長、萩原町民生活課主査、西尾文化的施設整備推進室次長、河原まちづくり推進室主任、松下文化的施設整備推進室主任、西内地域振興課主任

【傍聴人】 0名

【議事及び質疑応答】

1. 開会

2. あいさつ

富田十和地域振興局長

議事の前に・・・

(田頭会長)

前回の協議会の議題である『四万十町十和地域における今後の小中学校の在り方』について、前回の協議中発言のあった大道地区の統合の件は、今自分たちが進めようとしている事業の参考になる点が多くあったように感じる。私個人の意見とはなるが、今回の議事に入る前に皆さんと共有したいと思う。

※縦軸は人口、横軸は時間(経過年)を表す表をホワイトボードに板書

これは現在の四万十町の人口と時間の経過を簡単に図式した時間軸の図になる。始まりの所を四万十町が合併した時とする。この時の人口が約22,000人。では、今がどれくらいかと言うと約16,000人を切っているという状況。合併後から現在17年経っていて、その期間に人口が約6,000人も減っているということ。この時間軸に統合の問題を当てはめて考えてみる。実際、今後も人口の減少は避けられないと思うが、この減少を少しでも緩やかにできるように町が施策に取り組んでいる。では、学校はどうか。人口が減っていくという事は相対的に生徒・児童数も減っていくことになるが、かと言って学びの質まで下げていいということにはならない。維持という形でもいいのかという訳ではない。なぜかと言うと、社会の情勢というのは大きく変化して新しいことはどんどん増えていく。10年、20年前と変わらない学びを維持するだけでは先に進まない。変わる情勢に合わせて学びの質・環境も少しでも改善していかなければならないと思う。

これを踏まえた上で、大道地区の取り組みの素晴らしい所は、これまでの経験や過去の出来事を元に統合問題に当たるのではなく、子どもたちの未来、統合以後の子どもたちの学びについて考えて動いたことにある。

文化的施設建設についてもそうである。先行きが見えない未来だとか、正解がないとか言う意見もあるが、実際に正解はたくさんあるのだと思う。その中のどの正解を持って問題解決に至るのかが、この協議でも必要になってくるのではないかと思う。『十和の未来のまちづくり』という根拠を持って、意見等をいただけるとありがたい。

3. 議事

(1) 文化的施設（図書館）十和分館について

(田頭誠志会長)

十和地区に図書館が必要であるか、ないか、意見をいただきたい。

結果として必要であるとなった場合、どういう施設がいいか委員の意見を集約していきたい。

(伊賀守委員)

なかなか難しい問題だが…。例えば、「農業」のことを知りたいということで施設に足を運ぶ。書かれている通りの分量や方法を知ることによって解決することは多少なりともあると思う。しかし、実際の経験者などの話も同時に得られればいいのではないか。

小学校が無くなるといった問題とは異なるが、学校以外の学びの場所の一つとして、子どもたちの成長の場になればありがたい。ただ本とふれ合える場所というだけでなく、山のこと、海のことでも何でも聞ける、教えてくれるアドバイザー的な人材を構えられることが望ましい。

(田頭誠志会長)

施設としての必要性はあるということか。

(伊賀守委員)

十和に住んでいる人にはあまり需要は無いかもしれない。だが、将来十和で住んでいく人たちの為にも必要な事ではないかと思う。都会と同じ様なことができること、拠点になるところがあるといい。

(村井洋平委員)

伊賀さんと同じ意見。アドバイザーのいる図書館があることで行ったら山のことがわかる、海のことかわかるというのは、自分たちのような外から移り住んだ者にとっては大変ありがたい存在である。また、そのアドバイザーという立場も職業の一つとしてとらえることで、司書以外の役割を用意することで十和の街としての幅、未来が広がると思う。

(栗原あゆみ委員)

施設は有った方がいいと思う。

今、旧小鳩保育所の図書コーナーを開放しているが、子どもたちも本を結構読んでいるという印象を受けた。借りていくという人は少ないが、ホールに滞在して本を取り、時間を過ごす姿を頻繁に見る。

図書館という施設にするのではなく、図書を携わる施設とする。そして図書から実体験に繋がられるような場所になっていけばいい。

水曜日は、子どもたちが放課後に宿題を集まってする場所になっているので、地域の人々の居場所になる施設になっていけばいい。

先日四万十町に移住希望の方がいて、実際に街の人の意見を聞きたいとなった時にどこへ向かえばいいかわからなかったとのこと。今回は役場の紹介もあって旧小鳩保育所まで足を運んでくれたが、行けば誰かに会えて、情報の共有ができる施設があればありがたいと思う。

(田頭誠志会長)

実際、旧小鳩保育所の運営にかかわっている方から、伊賀委員の発言に関わる意見が出てきたが、皆さんはどうか。

(松下洋平委員)

必要性で言ったら絶対にあつた方がいい。

だが、実際に文化的施設とは何のためにあるのか。文化的施設の本来の目的を聞きたい。

(大河原室長)

一昨年昨年と、サービス計画を作ってきて、主にソフト面の充実に取り組んできた。文化的施設は今の図書館美術館では担いきれない施設としての魅力を見出していく。例えば、人の憩いの場になる施設であったり、地域の情報窓口であったり、そういった意味での核になる施設と位置付けている。

そのことを前提に四万十町全域にその輪を広げられるように、今、旧小鳩保育所で行われているサ

タイトの貸出などをしながら、四万十町の中に展開していく。例えるなら、中央郵便局のようなもの。

また、既に四万十町にある学校が持っている図書館の機能であったり、あるいは郷土資料館などに分散されている文化的な資産などを上手く編み込みながら、町の核となる施設として動こうとしている。

現在ある図書館ではそのような展開は難しいと思われるため、文化的施設の未来を見るという点で言えば、期待もしてほしいし、皆さんの満足のいく環境を提供できればと考えている。

(松下洋平委員)

資料に図書館、美術館の入館者数などが記されているが、この数字は県や全国的に見ればどれくらいの数字になるか。

(大河原室長)

全国の公共図書館を利用している国民一人当たりの平均貸出冊数が5.1とか2。昨年度のデータになるが四万十町は平均貸出冊数が3.2。多いか、少ないかで言うとかかなり低い水準である。それから高知県の平均貸出冊数が4で、全国から見れば県も少ないが、その県平均から見ても四万十町の平均値は低い位置にある。まだまだ充実させていかなければいけない。

(松下洋平委員)

先ほど栗原委員の話にも出ていたように、住民が情報を知るために訪れる場所として施設も充実していけば、子どもたちの学びの充実の助長にも繋がるのではないか。ただ、本の貸し借りをするだけでなく、そういった面でのサービスも魅力の一つになるのではないかと思う。

(大河原室長)

一応、補足としてだが、図書館にいるのはもちろん司書だけではない。町民やいろいろな知識を持たれた方もその場にいる。司書という意味で言うと、図書館の中で特別支援図書館員という動きがあり、様々な分野があるので、一概に網羅できるわけではないが、仕事と関係を結び付ける図書館員、医療関係、病院と連携する図書館員など、各図書館施設に情報を渡していく。本の貸し借りをする場所というのは変わらないが、こういった動きは徐々に出てきていますので、この地域でも上手く活用していけたらと思う。

(田頭誠志会長)

今の事例は、町内図書館で現在あるサービスの一つなのか。

(大河原室長)

今言ったのは文化的施設の事例で、県のオーテピアでは行われているもの。四万十町はこれからというもの。

(田頭誠志会長)

現状、町内にあるのは四万十町立図書館と大正分館、それとは別で図書館機能を一部に含む別のものが文化的施設ということか。

(大元政策監)

今ある図書館施設に備わっている機能に、先ほどから皆さんがお話ししているコミュニティ方面の発達というのはまさにその事だと感じている。

(田頭誠志会長)

例えば、梶原町立の図書館は、一階にはピアノもあり、階段にコミュニティスペースもあり、各階各室にもそう言ったスペースがある。四万十町も図書館としての場所に美術館が加わるのなら、現在の体制でも可能かと思えるが、わざわざ文化的施設の設置は必要なのか疑問に思った。図書館、美術館としての幅を広げたものというイメージでいいのか。

(大河原室長)

個人の見解にはなるが、図書館、美術館を建て替え、それを含んだ見直しをしようとした時に、地域にある歴史的な資料の管理、コミュニティスペースの推進などを実行しようとするなら、図書館や美術館のみの見直しだとどこかをそぎ落とさなければ維持が難しくなる。なので、そういうもの全部を含んで管理、遂行できるような施設を今のところは文化的施設(仮)と名付け、今のその状態で計画が進められていると理解している。

(伊賀守委員)

やるという前提で話をするが、まず箱(施設)を構えたとして、しっかりした館長としっかりしたコーディネーターを置くと、その施設は立派なものになると思われる。箱の中身となる職員がしっかりとした人で構成されることが理想である。

(田頭誠志会長)

コーディネーターという立場も大事だが、そこと繋げる人も大事になる。

(伊賀守委員)

一人での管理は大変だろうから、ここみたいな委員を作って、その組織の力がどれくらいあるかで、箱がどれくらい使われるかが決まってくるのではないかと。

今、黒潮町でいろいろな動きがあるが、ある一定人を集めて老人ホームを訪問し、紙芝居を読んだりしている。そのような活動ができる施設を目指せたら、良い施設になるのではないかと思う。

(田頭誠志会長)

結局、箱もの建ててもそんな人がいないと動かないということ。

今まで出た意見の中では作るべきではという意見が多いがどうか。

(松下敦委員)

今まで図書館は、頭のいい人が行く場所と思っていたので、自分たちでも入りやすい、今までと違うタイプの図書館がいい。

(田頭誠志会長)

図書館というと、喋らずに過ごすであったり、難しい本しか置いてないであったり、そのようなイメージが先行する場所だったと感じる。

(中平良子委員)

そこに関連すると、人が集まる場所には飲食があると良くて、憩いの場になりやすい。飲食スペースがあると、本に興味がなくとも行ってみようかとなると思うし、硬いイメージも払拭されるのではないかと思う。そこを足がかりに、本来の図書というものにも興味を持っていただけるのではないかと。

(田頭誠志会長)

実際今は、本屋とカフェが一緒になっているところも出てきている。

(大河原室長)

文化的施設の方も、軽音楽まで流せるかはわからないが、基本的にはおしゃべりはどうぞ、逆に静かに読みたい人に静読室というようなものを作って、全体的には賑やかな空間にしていこうと考えている。飲食についても飲み物は蓋が付いているものなら大丈夫で、普通にお弁当なども食べて構わない環境にしていきたい。また、隣の半平カフェからテイクアウトのようなものができるようになるのであれば、持ち込んで楽しんでいただける、かなり自由な感じで使える図書館にしようと思っている。

コーヒーを置いているコーナーがある図書館もあり、図書館の姿も少しずつ変化していつている。ぜひそういう形で柔軟性も高い施設にしていけたらと思う。

(田頭誠志会長)

つまり、施設の中に静と動の空間があるということ。上手く住み分けができるような設計を進めているということ。訪問した者それぞれが選択できる環境になるということ。

(村井洋平委員)

千葉県出身だが、小学校の近くにある図書館が博物館と一緒にあった建物となっていて、ここの庁舎の3個分くらいの規模のものだった。利用者としては本を借りる者もいれば、2階の一角に長机が設置されており、そこで勉強する生徒が多く、だいたい高校生だった。

街の図書館と田舎の図書館では、利用者が違う気がする。実際、借りるのはいいけど返すのが大変だと思う利用者が多いように感じる。借りたいけど、そこがネックで借りられない人はいると思う。ただ、図書館以外にあったら嬉しい機能があれば、相対的に利用者の増加に繋がると思うので、皆さんと意見を交えながら、形にしていきたい。

(田頭誠志会長)

始めに自分が時間を貰って話をしたときには、主に子どもたちに重きを置いて話しましたが、実際は学びの質や環境は一生涯を通じて関わっていくものである。生涯教育としての学びの質、あるいは環境を少しでも右肩上がりにしていくということこそが、未来の選択肢を増やすということにも繋がるのではないかと思う。維持ではいけない。

そこで、文化的施設が無くても学びの質や環境を上向きにできるとか、学校統合しなくても少ない人数であっても大丈夫というプランがあればそれはそれでありがたい。それを踏まえた上で協議を進められたらと思う。

(松下洋平委員)

図書館の話に戻ってしまうが、もしかしたらフリーテーマの十和のデジタル化推進に関わることもかもしれない。現在、移動図書館を考えられているということで、自分がペーパー派なのもあるが、現代社会ではタブレット端末でのデジタル書籍の活用、ペーパーレスについても考えていただきたい。時代も変化していく中で、いつかは紙の本での供給が難しくなるかもしれないので、デジタル書籍でないと見れないという時代も出てくるかと思う。5Gなどの電波環境の促進も四万十町は進めているので、こういった対応も必要かと思えます。

(大河原室長)

今回のサービス計画の中で、デジタル化のデジタル書籍についてはオーテピアが利用を推奨しているので、そちらに倣って動いていこうと思う。

また、図書館とは関係ないですが、今 zoom であったりオンラインでいろんな環境で動きがなされている。そういった中でオンラインの講座などもできるので、大正でやっている講演会を十和と一緒に見れたり、窪川と一緒に参加できたりと、そういった面での展開もできるのではないかと思っている。

(伊賀守委員)

若い人は電子書籍を読むとかは簡単にできるだろうが、徳島県には葉っぱビジネスというのがあって、今実際にあるものを最大限に活用して地域振興に努める動きをしている。その中で、徳島の老人たちはスマホを匠に使い、販売などを行っている。十和も若い人よりは圧倒的に年寄りが多い環境だが、スマホを十分に使っている人は少ない。そういった面でのサポートサービス、勉強会みたいなものが開催されればありがたい。

(栗原あゆみ委員)

実はもうすでに旧小鳩保育所の方で『お助けスマホ』というサービスを展開していて、需要もある。

(伊賀守委員)

そういうことをやっていることが全体に伝わっていないと思う。まだ「旧小鳩保育所で何をしている？」という人が圧倒的に多い。要は、建物ができて人も大事というのはそこで、こんなことをしているとしっかり報告することで地域にとっての拠り所になっていくのだと思う。

(栗原あゆみ委員)

旧小鳩をやってて需要を感じている部分についてお話をしたい。乳児室の和室で昼寝をしている、詳しく言うと、本を読んでいる途中で寝落ちする方がいる。子どもはほかの大人の目があるので安心して

過ごせる環境でもあるのかと思う。

夏休みには帰省する親御さんも多いので、託児をやってくれないかという声もある。一時的に子どもを預けられる環境になればいいのか。自分もファミサポ会員になった。そういう形でもフォローできればいい。

(田頭誠志会長)

託児まで対応してしまうと現役員での対応が難しくなる。ただ、そういった面に精通した方と繋がりを作れば旧小鳩保育所の幅は広がるかと思う。何でもかんでも受け入れて、何でもかんでもその場所がやるのではなく、いろんな繋がりを作っていくことで、その場所で活動をしてもらうなどの、施設の在り方が定まっていくかと思う。

(村井洋平委員)

須崎にある施設でも似たようなサービスを行っている団体があるが、そこも引っ張っているリーダーがしっかりしているので維持を可能にしているのかと感じた。

そういうのが文化的施設でもできればいいと思う。

(伊賀守委員)

話が変わるかもしれないが、十和の地域でも村民運動会に出たくない、四万十川祭りに出たくないという人は多い。この課題は先に引っ張って行く人で変わってくる。こいのぼりの川渡しについては先導がしっかりしているから、今も続いている。今は、会をしても何をしても出たく無いという人が多い。それは引っ張っていく人の力もあるのではないかと思う。

(村井洋平委員)

なぜ出てこなくなったのか。

(伊賀守委員)

高齢化であったり、人前に出たくないであったり。そういった面での問題がほとんどかと思う。

(田頭誠志会長)

行きたくない、出たくないというのも権利だと思う。

文化的施設というのは、行きやすい施設になるといい。

(伊賀守委員)

コーディネートする人の力は大事だと思う。

(田頭誠志会長)

体制として一人の人に負担がかかりすぎるのは良くないので、システムとしてある一定以上の人がスキルを持っていることが大事。それを上手く継承していけるかも大事かと思う。

— 休憩 —

(田頭誠志会長)

皆さんの意見を集約すると、十和には何らかの施設を建設することに賛成という印象を受けた。前向きに作っていかうというスタンスで意見をまとめたいがよろしいか。

(委員全員)

賛成。

(田頭誠志会長)

この会では全員賛成。今後、図書館なり文化的施設、何らかの拠点を作るということで。あくまでこの会は町長への意見書をまとめる協議となっているので、必ずしもまとめた意見が通る訳ではないが、少しでも希望に叶う意見となるように協議を進めていきたいと思う。

(大元政策監)

町長の方針として、昨年思案したサービス計画の中で十和分館を整備するという方針を決定した。そこには町長の意向として十和地域にも一定の文化施設が必要ではないかという意見からである。先ほど田頭会長がおっしゃられたとおり、意見が必ず通る訳ではないが、今協議した内容は町長の意向に合致すると思われるので、このまま進めていただけたら。

一つ確認したいのは、図書館の分館をメインとするのか、図書館とは関係なく集まれる場所がほしいのか、その方向性を確認したい。

(田頭誠志会長)

コミュニティスペースを作るという話ではないという認識。図書館機能を有する施設を作ることで相違ないか。

(委員全員)

相違ない。

(田頭誠志会長)

図書館の十和分館となると、館長というのは一人となるのか。四万十町立図書館の館長が大正分館の館長も兼任しているが、そこに十和も加わるということなのか。

(大元政策監)

大正分館が町立図書館の枠から文化的施設への移行などで今後動くなら別だが。十和に関しては、分館として作るのか、文化的施設とするのかによって、館長の話も変わってくる。

(田頭誠志会長)

実際、大正分館もコミュニティスペースを構えていて、そこを活用して別の団体である町営塾じゅうくが活動を行っている。図書館とは別の学びをスペースで行っているので、そういう形もありということにはなる。

(大河原室長)

現状、図書館長兼務ということで町立図書館と大正分館の館長となっているが、本館に館長がいて、各分館にも館長がいるというのはおかしい話ではない。組織の体制というのは検討していくことの一つだと思う。

(田頭誠志会長)

連携できる体制が必要だと思うので、先導する人をきっちり決めていき、リーダー同士がしっかりと情報共有を行い、各施設が協働で運営していく形を目指していくべきかと思う。その中心となるのは文化的施設だと思う。

ちなみに、文化的施設ができたとき、図書館長はいなくなるのか。

(大元政策監)

イメージとしては、文化的施設という大きな枠があって、その中に町立図書館と美術館が含まれる形となる。そのため一番上の管理者に施設長、各館の館長を置くことを想定しているが、詳しいところについては検討しているところ。

(田頭誠志会長)

管理するポジションとしては作るというイメージで。とにかく協働していくということが必要になると思うので、そこを含めて進めてほしい。

(田頭誠志会長)

十和地域に図書館を建てるとして、新築で建てるのか、どこかの施設を使うのかという議論にもなってくるが、いかがだろうか。

(伊賀守委員)

とにかく作るなら、駐車場が広くて入りやすい環境を推奨したい。

ちなみに職員は何人ぐらい配置されるのか。役場の職員になるのか

(田頭誠志会長)

大正分館は何人体制で勤務しているのか。

(大河原室長)

大正分館は、週一日の休館日があるが、会計年度任用職員を3人雇用していて、勤務日はそのうちの2人が常時いる。

(田頭誠志会長)

その方々が図書館の貸し出し業務や整理を行われているということ。コーディネーター的なことはやっているのか。

(大河原室長)

読み聞かせのボランティア等やっているが、人数等はぎりぎりの状態である。

(松下洋平委員)

既存の建物での図書館の運営が面白いと思う。

(栗原あゆみ委員)

既存の施設を使うのはいい。ただ、学びの場の充実という面で見ると、子どもたちが歩いて行ける場所がいいのではないかと。今後、学校が統合されるなら、統合先の学校から近い場所にあった方がいい。既存でそういう場所があればそれを使ってもいいし、なければ新築も検討すべきではないかと思う。

(鈴木幸代委員)

大きいのをドーンと作るより、小さいものを作るのがいいと思う。地域的に移動困難者も多いし、それぞれの地区に点々と簡易的な施設を置く。施設が点在することで集まれる場所も増えて、独居も多く、誰かと話をするを求めている地域住民のニーズに応えることができるのではないかと。

例えば、隣保館や旧小鳩保育所はいい施設だと思う。その施設にはっきりした目的がなくても来れる場所があればいいと思う。

(伊賀守委員)

全部が十川に集まってしまうと、昭和地区にもあった方がいいという話にはならないか。

(田頭誠志会長)

サテライト的に現在置かれている旧小鳩保育所や昭和地区の施設を利用することはあるかと思う。ただ、ここで話すべき拠点というのは一ヶ所であるべき。

(伊賀守委員)

施設が設置されるということは必然的に職員が配置されるということ。施設が分散すると、それを管理する人の確保も大変になるはず。拠点となる施設を作るなら、先ほど話していた子どもたちの足が運びやすい場所に建てるのか、もしくは地域住民の交流の場として中心となる場所に建てるのか。大きく見ればそういった選択肢になるのではないかと。

(田頭誠志会長)

昭和に建てるか、十川に建てるかは別として、先日の議会で中尾町長が十川小中学校を義務教育学校にしていきたいとおっしゃっていた。十川小中学校が義務教育学校のモデルにふさわしいのではないかと話もあった。例えば、十川小中学校が義務教育学校になるのであれば、その図書館を共同施設にする。それが図書館の十和分館という考えもあるのではないかと。その施設については、学校の生徒はもちろん地域住民も使えるものとする。単純に学校施設の開放ではなく、地域の図書館、つまり共有施設(学校施設ではなくて)として開放するということ。そういった形だと子どもたちの学びの充実、地域住民の憩いの場というものを目指すことができるのではないかと個人的に思う。

(村井洋平委員)

今までの説明の中で、拠点を建てるにあたって必要なものは、サテライトを設置したり、どこにいてもサービスを受けられる環境を整えたりではないかと思う。個人的にはそういったサービスは近くにある方がいい。施設が最初から点々とあっても、そこに足を運ぶということ自体が難しいという

住民もいる。借りて、またそこに行くというのが大変だと思うので、借りてきて返すのは、集落のポストでもいいとか、そういったサービスを考えるのもいいと思う。

(田頭誠志会長)

現在、文化的施設、分館として動くためにサテライトであったり、移動図書館であったり動こうとしているが、そこに対して意見等はあるか。

(村井洋平委員)

サテライト+α機能アップしたらどうか。一つだけでなく、今が足りないというわけではないが。

(大元政策監)

今、分館として、拠点として協議していることは、図書館の分館としてだけでなく、人が集まったり、課題解決の場になることも大事なのではないかということ。今、こちらで動いているサテライトや移動図書館は図書のサービスを一貫していると自分は感じている。そこに+αと言うのが、皆さんがおっしゃっていた地域住民に対する地域に根差したサービスなのではないかと解釈している。

(大河原室長)

今、旧小鳩保育所がやろうとしていることが、目指しているものなのかなと思う。地域の人々の交流の場となり、かつ地域住民へのサービスも展開しようとしている。四万十町全体の広さや人の住んでいる場所が点々としていることもあり、たくさんの分館を作って、そこに人の配置をしていくのは難しい。

そこで今のところは町の中心となる拠点を窪川に構えて、そこに付随するように大正分館、十和分館の協働体制を構築する。窪川・大正・十和3つのポイントを押さえて、そこから行き届かない所に移動図書館やサテライトといった仕組みを使って、町全体に展開していこうというのが今考えていること。

(大元政策監)

旧小鳩保育所がやっていることがモデルになってくると思う。一方で、今のサービスをボランティアで行っているので続けていく仕組みが必要になると思う。例えば、役場などで人員を配置して、一定のお金を出して、そういった形で運営ができるのであれば、そのような仕組みを形成していくのもありだと思う。ただ、今のようにボランティアという形でやっていくのであれば、やる気のある方もいるだろうし、続けていく仕組みの模索を現在進行形で実証してくれている段階だと思うので、早急に答えを出さなくてもいいのではないかなと思う。

(村井洋平委員)

九州の豊後高田市、移住する方には土地を無償で分譲するのでそこに自分で家を建てて構えたりするのですが…。そういった補助ができるかは分かりませんが、移住者を増やして、施設に関わる人を増やせないか。または、分館のための協力隊を募集するとか。

(富田局長)

高齢者の移動を考えながら地域ごとに分散していくのも一つの方法なのかもしれないが、例えば井崎を挙げると、敬老会をやるにしても、19 地区ある十和地域で、お迎えに行く人もお年寄りになりつつあるこの地域で、それぞれの地区で施設を作ったとしても移動困難者の問題の解決には繋がらないと思われる。

現実的な判断として、十川地区もしくは昭和地区に拠点を構える。もう片方にはサテライトを構えて、足りないところは移動図書館で対応するなどが最適になるのではと思う。

(田頭誠志会長)

空想を話す場ではないので、現実的に十和の未来を考えるなら、事務局からもリアルな話を出してもらえたら、自分たちもしっかりとしたビジョンをもって協議ができるので、今後も出してほしい。

今日のところは文化的施設については、これで打ち切りたいと思う。次回は十和に建てる何らかの拠点について意見をだしていただく。

(2) フリーテーマの決定

事務局よりアンケートについて説明

○事前アンケートにて委員から出た意見

- ・山間地のこれからについて
- ・十和地域のデジタル化推進について
- ・働き手マッチングについて

(伊賀守委員)

この3つで広げたら、どこへでも入っていける。

(田頭誠志会長)

確かにその通りだが、『山間地のこれからについて』で協議していくとなると焦点化していくのが難しくなる。

(村井洋平委員)

前年、旧小鳩について議論してきたので、似たような事例として縫製工場について議論できたらいいのでは。

(田頭誠志会長)

話し合ったことが目に見えて、実際に進んでいく。そういった変化を感じられる協議をしていけたらいい。

(松下洋平委員)

働き手マッチングについて説明してほしい。

(栗原あゆみ委員)

秋の収穫時期に、新規で始めた人のところに人が集まらないということが多いが、それを補う形で全国からその時期だけピンポイントで来てもらえたらいいなと思っていて、今既存で行われているサービスが「おてつたび」というマッチングサイトがある。そちらを利用すると、その時期に、その人がやりたいことの状況を知れるので、上手く利用すれば、町内への人の呼び込む形にもなり、移住につながれたらいいなと思っている。

(松下洋平委員)

今、別の会でそういったものを作っているので、今月くらいに完成するのではないかと思われるが、実際そういったものが作られているという話というのは広がってないのかなとは思う。

(富田局長)

国の方も農業の分野に限らず、特定地域づくり協働組合事業と言って、高知県であったり、島根県と言った人口減少・高齢化の著しい県などに制度があり、事業所同士で連携を取って人を雇い、そこに補助も入れて、人の手が足りない時期に回していく仕組みであったり、最近農業の関係で言えば、農村 RMO という制度ができた、働き手をうまく回していく仕組みというか、そういうのがある。十和の方で言うと、松下敦委員のところではセンブリを8人くらいシーズンで雇っている。同じシーズンでユズやショウガとかがあり、その時期だけでだいたい100人くらい雇っているはず。そこに協力隊を入れるであったり、特定地域づくりで人を入れたり、現実的に追いついていくためには、独自の仕組みというのが、十和みたいな山間地域では必要な状態である。このことについてはしっかり考えていかなければならない課題であり、できればテーマとして挙げていただけたら嬉しい。

(田頭誠志会長)

今日出た意見は、持ち帰っていただきまた考えてもらいたい。

— 終了 —